

復活節第4主日

第1朗読 使徒言行録 13・14、43-52

第2朗読 黙示録 7・9、14b-17

福音朗読 ヨハネ 10・27-30

2025.5.11 9:30 ミサ

カトリック高円寺教会

イエズス会 アン助祭

共同体の皆さん、今日、わたしたちは復活節第4主日のミサをともに祝っています。この日は、教会の伝統により、毎年ヨハネ福音書 10 章が朗読される、特別な主日です。

そこでは、イエスが「良い羊飼ひ」としてご自分のことを語られています。今日読まれたのはその後半部分でしたが、わたしたちはそこから、改めて「良い羊飼ひ」とはどういう方なのか、その意味を心に深く受け取ることができると思います。

良い羊飼ひとは、自分の羊、一匹一匹の名前を呼び、豊かな牧草へと導き、日々の世話をし、必要とあれば、自らの命までも差し出す者です。イエスは、まさにそのような羊飼ひとして、わたしたちに寄り添い、導いてくださっています。

実は、羊飼ひというイメージは、新約聖書だけでなく、旧約聖書の中にも繰り返し登場します。たとえば、エゼキエル書 34 章には、羊飼ひとしての責任を果たさず、自分の利益ばかりを求め、民である羊を顧みない指導者たちへの批判が記されています。その一方で、預言者たちは語ります。「まことの羊飼ひは、神ご自身なのだ」と。

皆さん、神こそが、わたしたち一人ひとりに深い愛と忍耐をもって関わってくださる方です。わたしたちは決して一人ではありません。神はいつも、慈しみに満ちた御心で、わたしたちを導き、守り、支えてくださいます。この確信は、神の子であり、わたしたちのために人となられたイエス・キリストにおいて、はっきりと示されています。イエスこそが「良い羊飼ひ」（ヨハネ 10・11）であり、ご自身の体と血をもってわたしたちに永遠の命を与えてくださる方です。

このことについて、ヨハネ福音書に記されているイエスの次のような言葉をあらためて耳を傾けてみましょう。

「わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生きするためのわたしの肉のことである」（ヨハネ 6・51）。あるいは、「わたしは彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない」（ヨハネ 10・28）。

また、第2朗読の黙示録では、イエスが「過越の小羊」として、「小羊は彼らの牧者となり、命の水の泉へ導く」（黙示録7・17）として描かれています。ご自身を十字架で捧げ、死んで、復活されました。そして、わたしたちはイエスを通して、父なる神と和解され、神の子、神の聖なる民とされたのです。

では、わたしたちが「良い羊飼ひ」であるイエスを信じるということは、どのような生き方を意味するのでしょうか。その答えは、イエスご自身の言葉にあります。「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う」（ヨハネ10・27）。これは羊飼ひと羊との深い関係を表すだけでなく、イエスがわたしたち一人ひとりを招いている言葉です。

「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける」——ここで、イエスはわたしたちに、常に主の声に耳を傾けるよう呼びかけています。この「声を聞く」ことから、神との交わりが始まるのです。「主の声を聞く」とは、静かな時間をとって、御言葉に向き合い、神の声に耳を傾けることです。忙しい毎日の中で、そのような時間をとることは簡単ではありません。でも、もしわたしたちが心を開き、イエスの声に耳を傾けるなら、そこに新しい気づきと恵みが生まれます。「神がわたしを知っておられる」、「神がわたしを愛しておられる」という確信が、わたしたちの心の中に芽生えるのです。そうして、詩編23編の言葉のように、わたしたちはこう感じるようになるでしょう。「死の陰の谷を行くときも、わたしは災いを恐れない。あなたがわたしとともにいてくださる」（詩編23・4）。

主の声を聞き、自分が主に愛されていると知ったわたしたちは、次に、主に従う者となります。「従う」とは、イエスが歩まれた道をたどり、同じ方向に向かって生きることです。イエスは常に貧しい人、苦しむ人に寄り添い、いやしを与え、手を差し伸べられました。だからこそ、わたしたちもまた、その愛の業に与るよう招かれています。

今日のミサの中で、主が良い羊飼ひであるという確信を、もっと深く心に根付かせていただけますように。また、今月、聖母マリアの月のこの時期にあって、聖母マリアとともに祈りながら、主キリストの声にもっと耳を傾け、主を深く知り、主に近づくことができるよう、願いましょう。

皆さん、今日は「第62回世界召命祈願の日」でもあります。そして今年のこの日は、特に大きな意味を持つ日となりました。それは、神が新しい教皇——教皇レオ14世——を、教会とこの世界に与えてくださったからです。この出来事は、神がいつも教会を深い愛とまなざしのうちに見守っておられること、そして、多くの若者たちが奉献生活を選び、福音の喜びと希望をあかしする者となることを、神ご自身が望んでおられるということを、改めてわたしたちに示しているのです。

教会には今日もなお「良い羊飼ひ」が必要です。そして、自分の人生を神に捧げ、奉獻生活に身を置く人が必要です。今年の召命祈願の日にあたり、教皇フランシスコは前に入院中の時、メッセージを送りましたが、このメッセージの中で、「召命とは決して心に秘めておく財宝ではなく、信じ、愛し、希望する共同体の中で^{はぐく}まれ、強められていくものです。神の呼びかけに独力でこたえられる人はどこにもいないのですから、わたしたちのだれもが、兄弟姉妹の祈りと支えを必要としている」と強調されています。ですから、今日のミサでは、一つの信仰の共同体として、新しい教皇のために、そして神の畑に多くの働き手を送ってくださるよう、心を合わせて祈りましょう。アーメン。

参照：2025 年「第 62 回世界召命祈願の日」教皇メッセージ「希望の巡礼者——人生というたまもの」（2025 年 5 月 11 日）

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>